

読後雑感：2011年 第29回

小島正憲

1. 「孫文」 2. 「中国義士伝」 3. 「2025年 米中逆転」 4. 「中国化する日本」

1. 「孫文」 榊添要一著 角川書店 10月10日

副題：「その指導者の資質」 帯の言葉：「革命の条件とは！？ 現役政治家が問う異色の研究書」

本書は、参議院議員で元厚生労働大臣、「新党改革」代表の榊添要一氏の近著である。榊添氏は日中関係を、「隣国で、関係が深ければ深いほど、様々な問題が起こる可能性が大きい。隣同士だから引越すはできない間柄だ。だからこそ、表面化した問題に対して、未来志向の関係を築き上げるように、政治家がきちんと対応することである」と書き、続けて「そんなときに大事なものは歴史である。…(中略)。日本人ほど歴史を学ばない民族は他にはない。だからどうか孫文をよく知ってほしい。こんにちに至るこの日中の百年史を知って欲しい。孫文の言葉をもう一度繰り返す。“日本と中国が争ってはいけない”と主張している。そして榊添氏は、昨今、日中関係がうまく運ばない理由の一つを、「孫文のような広い視野をもった政治家が日中両国に少ないからである」と書いている。この文脈からは、あたかも「自分こそが、孫文の再来であり、閉塞した日中関係を打開できる政治家である」という自己宣伝にも受け取れる。

榊添氏が一般の政治家よりも、はるかに博学多識であることは、私も認める。本著でも、孫文と宮崎滔天、梅屋庄吉などの交友関係などの考察には、その見識の広さがいかんなく発揮されている。しかし孫文がコミンテルンに支援を仰いだ経過や黄埔軍官学校が果たした大きな影響については、ほとんど触れられていない。それどころか、「私は、本当はロシアの援助を受けたくないんだ」という孫文の言葉(「孫文と辛亥革命を助けた日本人」 保坂正康著)を、わざわざ書き足している。

榊添氏は中国が経済大国になったという認識に立って、「これからの中国には世界経済全体に対する責任がより強く求められてくるだろう。たとえば1998年に起きたアジア通貨危機の際、当時の宮沢喜一蔵相が、アジア支援のために300億ドル規模の資金援助を行うと発表し、IMFなどと共に手を尽くして救った。少なくとも大国の意識があったから、そうした広い視野で対処することができた。これだけの経済力をもつことになったのだから、中国も将来は同様の役割を果たして欲しい」と論じている。私は、中国経済が砂上の楼閣であり、マンション・バブル崩壊とともに、中国の金融機関などが大きな痛手を被ると考えており、その支援の役割を再び日本が演じなければならないと考えている。

榊添氏は日中間では、「忠誠心」という価値観が根本的に違うといい、中国では「どちらかといえば、勝ち馬に乗ることが重視される」と書いている。そして「中国では、自分が仕えていた主君から権力が失われると思った瞬間に、できるだけ多くの手勢や武器を持って新たな権力の持ち主となる革命派にうつる、というわけだ」、「こういう中国の話と比較対象になるのは、会津の白虎隊だ。白虎隊は、最後まで徳川に忠義を尽くす。中国からすれば、あのような行為はバカに映るのだろう。なぜいつまでも主君に忠義をつくすんだ。さっさと明治政府側に寝返ったらどうだと。中国では、機を見るに敏で、革命軍に寝返ることで高く評価される」と記している。この記述は、博学で緻密な論を展開する榊添氏にしては、いささか粗雑な見解である。中国にも「主君に忠義を尽くして死んでいき、後世に高く評価されている人物」もいれば、日本でも「簡単に寝返って、その後を新体制でまっとうした者」もいるからである。

2. 「中国義士伝」 富谷至著 中公新書 10月25日

富谷至氏はこの本で、漢の蘇武、唐の顔真卿、宋の文天祥の3人を取り上げ、「彼らが命を賭して守った価値、責務とはなにか」を解き明かそうとしている。この本は現代中国とは直接関係ないが、現在、私は共産主義における転向や変節という問題を考えているので、読んでみた。

漢の蘇武が匈奴に囚われて20年、極寒の地バイカルに単身放逐されても、なお節義を守り生き抜いたことについて、富谷氏は、「蘇武が貫き通したものの、決して妥協しなかったもの、それは皇帝と臣下、否、個人と個人との間に結ばれた信頼であり、節義ともいべきその紐帯は、維持し守り続けねばならなかった。節を曲げることは、それは相手との信頼関係の破棄のみならず、自己の存在の否定であった。“士は己を知るものために死す”、これは自己の価値を認めてくれた者に対する恩義であるとともに、自己の存在を価値たらしめるものであった」と書いている。

唐の顔真卿が玄宗、肅宗、代宗、徳宗と4代の皇帝に仕え、その間、一貫して正義を主張して筋を通し、そのために時の宰相と対立し、幾度となく左遷されたが、彼の学識、度量のゆえにそのつど中央に戻ったことについて、富谷氏は、「顔真卿が守らねばならなかったもの、それは士大夫、読書人がその学識によって身につけた責任、義務、節義であり、それを守ってきた士大夫として一族の知の伝統であり、その放棄は自己と顔氏一族の存在を否定することだったのだ」と書いている。

宋の文天祥が宋滅亡後、北京の牢獄で3年幽閉されても、なお節義を守り処刑されていったことについて、富谷氏は、

「進士、状元という経歴、それが文天祥たち進士合格者の責任と義務であり、守り通した誇りであった」、「(科挙制度)での成功者は、その制度を当然肯定するものであり、制度に基づく組織＝国家の体制は是認されるものであり、維持せねばならない。瓦解は、自らの存在の否定に他ならない」と書いている。

最後に富谷氏は、「漢の蘇武、唐の顔真卿、宋の文天祥、すなわち彼らが守り通した責務、妥協できなかった価値観、それは彼らがそれぞれ異なる“義”に依ったからに他ならない。蘇武にあつては任侠的信義であり、顔真卿にあつては血統が受け継いできた士大夫の学知・理知とそれに基づく行動であり、そして文天祥にあつては進士及第状元の経歴とその経歴に期待される責任と誇りであった。完遂せねばならない責務、守るべき節義が時代によって違っている以上、“義”は一定不変の意味をもつものではなく、時代による可変性を有する」と書いている。

続けて富谷氏は、「社会のエリートとして選ばれた者が有する自覚、責任、義務はノブレス・オブリージュといわれる。私は思う。その社会、その時代の選良意識が強ければそれだけ節義、道義への自負が強い。逆に“義”への意識は、選良であつてこそ出てくるものではないだろうか」、「あらゆる方面で格差是正、平等が強調される今日の日本、学力均等、一億総中流意識のなかでは、節義の丈夫を生み出す環境は果たしてあるかと言えば、さあどうであろうか。節侠に生きた蘇武の不屈、知を力とした顔真卿の意地、状元の文天祥の矜持を育んだエリート意識を生み出す原動力は何か、現代社会、今日の日本ではいったい何が現代の義をつくりあげるだろうか。はっきりいって私には見つからない」と書いている。私は同様の言葉が、現代中国にも当てはまると思う。

3. 「2025年 米中逆転」 渡部恒雄著 PHP 研究所 12月12日

副題：「歴史が教える米中関係の真実」 帯の言葉：「アメリカの中国政策はなぜコロコロ変わるのか？」

私は店頭でこの本の表題を見て、あまり読む気がしなかった。どうせ、この手の表題の本にありがちなあまり中身の無い予測本だろうと思ったからである。しかし実際に読み進めて行く間に、なかなか含蓄のある本であることがわかった。渡部恒雄氏はこの本の大半を、米中関係の歴史の記述に費やしている。その意味では、副題を本題にすべきであったのではないと思う。しかも著者の結論は、「現在の米国が、開かれた国家として人口を拡大し、世界の最先端の技術を受け入れるかたちをとっているかぎり、今後の予想される未来において、現在の米国の圧倒的な優位性が、中国に取って代わられる可能性は小さいだろう。今後10年はもちろん、2050年を睨んでも、米国と中国の立場の逆転までは起こらないと考えるのが自然である」と、「2025年 米中逆転」を否定しており、この点ではまさに羊頭狗肉の書となっているからである。

渡部氏はオバマ政権で「米中 G2」が浮上してきた背景として、「オバマ時代の米中関係が過去のどの米国の政権とも異なるのは、中国の政治経済および軍事の能力がかってないほど影響力を増し、米国の経済とも深い相互関係を持つようになったと同時に、米国は世界への影響力を低下させていることだ」、「米中は大国としての意識を共有しているために、意見の相違はともかく、対話するスケールが一致している。したがって、世界のガバナンスについての戦略対話がしやすい、ということになる」ということがあると書いている。私は、「大国としての意識」と同時に、ともに「借金大国であるという自覚」があるからだと付け加えるべきだと考える。

渡部氏は、「対中楽観視による罨は、歴代の米政権が中国の変動期に必ずといっていいほど陥るお馴染みの失敗といえる」と書き、「朝鮮戦争時に毛沢東は米国と戦争するという自殺行為をとらないだろうという希望的観測」、「ブッシュ(父)政権は、天安門事件で戒厳令が出されるような状況になっても、鄧小平は改革・開放を推進する人物であるから、学生と政府の対決が平和裏に解決されると考えていたようだ」などの例を上げている。

渡部氏は、米国内には中国に対する異なる思想を持つ4つのグループ、「①保守派と国防総省に多い対中安保警戒派、②政権を中心に政策選択の幅も広い対中関与派、③中国との経済関係で儲ける対中経済推進派、④民主党でも中国に厳しいリベラル・人道派」が存在しており、それが渾然一体となって、その時期の国内外の重大事件と重なって、対中政策を形成してきたと記している。

渡部氏の、「米国人の対中姿勢に影響を与える重要な事象が、この時代のキリスト教伝道師の活動である。当時の中国におけるキリスト教伝道師のなかでは、米国人の数が圧倒的に多く、米国内での人道的社会運動の影響を受けて、その目的がたんに中国人をキリスト教に改宗させるだけでなく、中国全土を貧困や迷信などから救済しようとする道義的なメンタリティが育っていた。そしてこれ以降、中国で育った米国人宣教師の子弟から、米国内の“中国救済への使命感”に影響を与える人物が育っていくのである」という指摘は、傾聴に値する。

さらに渡部氏は、米国の選挙制度について言及し、「何より、人権や民主主義という米国の価値にかかわる問題こそは、米国民の支持や同情を大きく集めることができる効果的なツールだからである」と書き、その有効性を説いている。またレーガン大統領時代の台湾政策を取り上げ、「側近の意向に反して、レーガン自身の台湾支持の気持ちは固く、陣営内での調整が難しかった。しかし最終的には、レーガンは側近の意向に沿う形で事を収めていく。米国の政策過程では、大統領本人の意向もさることながら、側近との相互関係も大きな影響を与えているのがよくわかる」と書いている。

4.「中国化する日本」 與那覇潤著 文藝春秋 11月20日

副題：「日中“文明の衝突”1千年史」

この本は、奇想天外という表現があてはまるような本である。その内容もさることながら、「物語」風の文体にも、いささか面食らった。おそらく與那覇潤氏は、読者に親しみやすいようにと考え、この文体で著したのだろうが、冗漫な文章になっているくらいがあり、逆にわかり難くなっているのではないかと、私は思う。また本書の結論部分はきわめて短く、大半が歴史上の分析に費やされていることから、副題を表題にすべきだったのではないかとも思う。

與那覇氏の結論は、「私たちが生きていかなければならないのは、おそらくは**1000年も前に“歴史の終わり”を迎えて変化の止まった中国のような世界**であり、そしてそのような社会にいかなる正負の側面があり、なにをなすことが可能でなにをやったら危険なのかを過去の事例から学ぶことこそ、いま歴史というものに求められている使命と確信します。そして、それこそが自ずと、この国の復興のみでなく、隣国の人々との共生、さらには彼らが置かれている状況の改善にもつながってゆくものである」というものである。

與那覇氏は、「本書でいう“中国化”とは、そういう現実の日本と中国のあいだの力関係のことを指すのではなく、“日本社会のあり方が中国社会のあり方に似てくること”を意味します」と書き、「今より1000年と少し前の西暦960年、中国大陸に“宋”という新たな王朝が生まれました。この王朝の下で、中国社会の仕組みは一度切りの大転換を遂げ、転換後のしくみは現在に至るまで変わっていない」と自説を展開している。そして宋代の特徴を、「宋朝時代の中国では、世界で最初に(皇帝以外の)身分制や世襲制が撤廃された結果、移動の自由・営業の自由・商業選択の自由が、広く江湖に行き渡ることになります。科挙という形で、官吏すなわち支配者層へと成り上がる門戸も開放される」と記している。

與那覇氏は、膨大な歴史文献を駆使しながら、この本で「中国化する日本」という持論を展開している。私にはとてもこの與那覇氏の主張の是非を論じるだけの学識はない。どなたか歴史に通暁した方からの、この本の論評を読ませていただきたいものだと思っている。與那覇氏の歴史を「まさかりで切り割る」ような主張には、私も心底驚いた。

以上